

第65歩

「蝉時雨に思う」

梅雨が明けるとうるさいほどの蝉の声が一斉に聞こえてきます。しかし、今年は、史上初めて6月に梅雨が明けるという異常な事態。梅雨明けの炎天下の中でもほとんど蝉の声を聞くことはありませんでした。7月中旬になってやっと本格的にその声を聞くようになりましたが、一方で、朝、マンションの階段で、弱って仰向けになり、息絶え絶えの蝉を見かけることもいつもの年より多い気がしました。 蝉は地中で数年を過ごし、地上に出てからはわずか数日の命しかなく、残された時間を惜しむように、夏空へと全力で声を放ちます。その合唱の響きは「蝉時雨」と呼ばれ、まるで降り注ぐ雨のように、盛夏の空気を震わせます。蝉のよく鳴く日は晴れることが多く、雨や曇天の日は鳴き声が弱まり、太陽と気温の変化に敏感な彼らが、自然の小さな天気予報士であることを思わせてくれます。しかし、ここ数年続く酷暑の夏は、蝉の鳴く時間やリズムすら狂わせているようです。早朝すぐに力尽きて鳴き止む蝉がいると思えば、夕暮れまで鳴き続ける声もあり、気候変動により、季節と自然の常識が変化しつつあることを告げているかのようです。 蝉の命といえ、角田光代氏の小説「八日目の蝉」を思い起こします。赤ん坊の誘拐事件に端を発するサスペンスで、後半の主たる舞台は、美しくやさしい小豆島と瀬戸内海。それだけでも愛着が湧く小説です。蝉は地上に出て7日で死ぬのが自然な運命とされています。8日目まで生きてしまった蝉は、すでに「余分な時間」を生きているのであり、どこにも居場所のない存在なのです。誘拐した子を自分の子として育て、逃亡の旅を続ける主人公の時間は、地上で懸命に生を謳歌しようとする蝉の姿と重なります。 「八日目の蝉」というタイトルには、自然の摂理を越えた存在への同情とも批判とも取れる複雑なまなざしが込められているようです。七日で命を終えるはずの蝉が八日目を迎えるように、許されぬ時間生きること。それは、季節の境界が曖昧になった現代の夏とも響き合っているように思えます。

